Vol. 36

ぞうきいしょくけいけんしゃ
臓器移植経験者とそのご家族からの手紙

think transplant

がんばれ、一緒(いっしょ)に がんばっていこう!

来月の6月で、移植(いしょく)して3年の時を迎(むか)えようとしています。
私(わたし)がドナーさんの尊(とうと)い命のバトンを受け取り、生まれ変わらせていただいた時から現在(げんざい)まで、語り尽(つ)くせないほどの感謝(かんしゃ)と喜(よろこ)びと、生きている有り難(がた)みを感じて参りました。

中学1年生の時、100万人に1人というとても珍(めずら)しい病気になりました。

その後私(わたし)は、大好きだったバレー部をやめ、体育も、遠足も、修学旅行(しゅうがくりょこう)も参加できず、運動会はみんなを応援(おうえん)する係になりました。

高校生の時、24時間点滴(てんてき)で薬を流し続ける治療(ちりょう)が始まりました。
しかしそれには、皮膚(ひふ)が熱を持って顔が真っ赤になってしまうという副作用がありました。

大学では
「そこの真っ赤な顔の学生、朝から酒なんて飲んでくるな」
とマイクで怒鳴(どな)られ、学生たちに笑われたりも

しました。私(わたし)も顔では笑っていたけど、泣きたい気持ちでいっぱいでした。
でも、生きていくために必要なんだと頑張(がんば)りました。
そんな副作用に耐(た)えながらも、それでもだんだんとできないことが多くなり、家族と過(す)ごす時間より、入院している時間のほうが長くなっていきました。

「こんなに頑張(がんば)ってきたのにな…どうしても報(むく)われないことってあるんだな。」
と知り、死を意識(いしき)し始めていました。

その数か月後、ドナーさんの命のバトンを受け

取りました。
移植(いしょく)は私(わたし)を、1日で生まれ変わらせてくれました。
10年間外せなかった点滴(てんてき)と酸素吸入(さんそきゅうにゅう)の管が全て取り去られ、肌(はだ)も真っ白になったのを見た時の感動は一生忘(わす)れられません。
今は一人暮(ぐ)らしをしながら、お仕事ができるまでになりました。

そして、いつも自分のことより私(わたし)の幸せを願い続けてくれた父と母。
先日帰省した時にはその両親を私(わたし)が引っ張(ぱ)って、夕方の涼(すず)しい田舎道(いなかみち)を親子3人で散歩しました。
「早く!」と走って坂を上ると、とても嬉(うれ)しそうに

後ろから見ていました。

この肺(はい)は、ドナーさんの尊(とうと)い命をお預(あずか)りしているという思いが強くあります。
私(わたし)の一番の自慢(じまん)は、毎月の定期受診(じゅしん)で主治医の先生に「今月も安定していますね」と言っていただけることです。

これからも、私(わたし)の中の応援団長(おうえんだんちょう)のドナーさんから聞こえてきそうな、「がんばれ、一緒(いっしょ)にがんばっていこう!」の声と、いただいた大切な肺(はい)とともに、「この人でよかった。」と思っていただけるような生き方をしていきたいと思います。

心から、本当にありがとうございました。

（think transplant vol.36より抜粋（ばっすい））

ご子息様から命の灯火を頂(いただ)いた娘(むすめ)の父母、家族一同より

3年前、私(わたし)の娘(むすめ)は明日をも知れぬ、大変危険(きけん)な状態(じょうたい)にありました。
それは、私(わたし)たちの人生を静かに、しかし確実(かくじつ)に変え始めました。
年ごとに病床(びょうしょう)で過(す)ごす日が増(ふ)え、医師(いし)からの言葉にも厳(きび)しさが増(ま)しました。
それでも「生きてくれるだけでいい。」と願う私(わたし)たち。
しかしそんな願いすら、日ごとに削(けず)り取られていく現実(げんじつ)。

内科治療(ちりょう)の限界(げんかい)を告げられた日の絶望(ぜつぼう)感を、
今でも忘(わす)れることができません。

それが、病院から移植手術(いしょくしゅじゅつ)の連絡(れんらく)を受けた日。
私(わたし)たちの人生が、涙(なみだ)から笑顔へ、絶望(ぜつぼう)から
希望へ大きく変わったのです。
こんな夢(ゆめ)のような日が来るとは、とても思いま
せんでした。

移植手術(いしょくしゅじゅつ)後、
「ここからが頂(いただ)いた肺(はい)です。しっかりした立派(りっぱ)な
肺(はい)ですよ。」
とドクターがおっしゃった時には、涙(なみだ)が止まりま

せんでした。
弱り切っていた娘の心臓が、肺が、血流がいきいきと動いている。
まさにご子息様から、命のたすきをお受け取りした瞬間でした。

娘は移植手術間もない頃、激しい痛みの中で「この部屋にいつも誰か男の人がいるよ。お母さんには見えないの？」
と口にしていました。
容体が落ち着いた頃にそのお姿は見えなくなったので、「もしかしたら肺を提供してくださった方が、私をずっと見守ってくださっていたのかも

しれない。」と申していました。
その方こそ、ご子息様であられたのでしょう。

私(わたし)たち家族は、ご子息様の命日には、家族みんなで仏(ほとけ)様にお参りしております。
「娘(むすめ)をお助けくださり、ありがとうございます。」
「娘(むすめ)に笑顔を取り戻(もど)してくださり、ありがとうございます。」
「私(わたし)たちに命の尊(とうと)さと、生きる喜(よろこ)びを教えてくださり、ありがとうございます。」
お察しいたしますに、ご子息様は人一倍賢(かしこ)く、人思いで、お体も健やかであられたようですね。
そんなご子息様を失くされたお母様の悲しみ

は、察するに余りあるものがございます。
でも、ご子息様は娘(むすめ)の中に確実(かくじつ)に生き続けてくださっていますよ。

娘(むすめ)は「普通(ふつう)の人と同じように仕事ができる。」
と感謝(かんしゃ)し、
「今度は自分がお世話になった恩返(おんがえ)しがしたい。」
「ありがとうの気持ちを忘(わす)れない。」
と笑顔で頑張(がんば)っています。
祈(いの)っても願っても叶(かな)うことのなかった生きる喜(よろこ)び、
家族の幸せを、ご子息様から恵(めぐ)んでいただくことができました。
名も知らぬお方ではありますが、感謝(かんしゃ)しても

感謝(かんしゃ)しきれず、ただただ両手を合わせ、拝(おが)ませていただくばかりです。

お母様がどれほど深くご子息様を愛しんでおられたことかと思いを馳(は)せながら、頂(いただ)いたお命をけっして無駄(むだ)には致(いた)しません。
どうぞお母様もご尊身(そんしん)をおいといくださいますよう心から念じ申し上げます。
ありがとうございました。

本当に、ありがとうございました。

（think transplant vol.36より抜粋(ばっすい)）

臓器移植に関するご質問・お問い合わせ先

公益社団法人 日本臓器移植ネットワーク
0120-78-1069（平日 9:00-17:30）

2018.03